

## 第二百七十一 善後策

此夜お登和嬢は一縷の望を抱いて寝れぬ、小山ぬしの盡力其甲斐あらば大原ぬしは押付婚禮を免れて忽ち海外へ赴き給はん、大原ぬしがあの誠實と熱心とを以て西洋の家庭教育を調べ給はゞ、歸來我邦を益する事幾千ぞ、學校教育には學士や博士の多きこと山の如くなれども未だ著しき教育の効果を見ず、大原ぬしがあの誠實なる心を以て我邦の家庭教育を改良し給はゞ、世人は將に神とも佛ともして其徳を感謝せん、我身も不肖ながら家庭料理の改良を本として大原ぬしの事業を助けばやと未來の想像は愉快に充されて結びし夢も温に樂しかりき、其翌日お登和嬢は今にも小山ぬしが悦ばしき報告を齎し來るならんとて待ちぬ、夜に入るまで小山遂に來らず、二日目は懸念の中に一日を過ごせり、越えて三日目に至りても小山方より何の消息無かりければお登和嬢窃に心を痛めて兄に向ひ「兄さん、あの事は何うなりましたせう、まだ小山さんから何の御返事もありません子」と尋ぬる人の心にも劣らぬは兄の心配「爾つさ、私も毎日返事を待つて居るがまだ何とも言つて來ない處を見れば容易に埒が明かないのだらう、洋行するなら婚禮を濟ませてからとお代さんの親達が強情を言ふに違ひ無い」お登和嬢「大原さんは一旦御婚禮の事を承諾なすつたのですから今更無理に延ばし度いと被仰り難いでせうし、外の人達から餘つ程旨くお執成をなさらなければ中々事が六か敷う御座いませう、其癖小山さんは昨日も一昨日も大原さんのお家へいらした御様子ですがお歸りがけに此へお寄りなさらぬのを見ると何うしても事が御面倒の様です子、もしや大原さんが婚禮を濟ませてから洋行しますとお郷里の人達に被仰つて了つたのではありますまいか、それで小山さんが何とも知らせて下さらないのかと思ひます」と過度の心配は兎角に餘計な先潜りをする、兄は言下に打消し「イヤ、小山君は爾んな男で無い、不可と極まつたら必ず其通りに返事をして來る、言ひ難いからとか顔が出し難いからと言つて事の始末を曖昧にする様な人で無い、多分まだ決着しないのだらう、交渉が中々面倒でまだ孰れとも斷言が出来ないのだらう、

然しお登和や、世中の事は必ず成ると思つて居て成らなかつた程失望の大なる事は無い、成らないと思つて居て成れば此上愉快な事は無い、尤も初めから成らないと思ふ事を望む人は無いけれども、若しや成らなかつた時には斯うすると善後策を最初に考へて置くのは一番確な道だ、儲かると思つて商賣して損をして俄に狼狽するのは思慮の足りないのだ、もしや損をしたら斯うすると最初に善後策を考へてから商賣にかゝらなければならん、勝と思つて戦争をして負けて騒ぐのも其通り、負けたら斯うして盛り返すと云ふ最後の策を定めなければ迂つかり戦争も出来ない譯だ、先年の日清戦争の様に勝つてさへ遼東を横取りされると云ふ様なのは最初に善後策を考へて置かないからだ、アハ、爾んな事は和女の身に關係も無いが、もしや小山君の盡力其甲斐が無くつて大原君がお代さんと婚禮する事に極まつたら和女は何う云ふ風に覺悟を定める子、萬一の時のために和女の心をよく聞いて置かなければならん」と兄の一言にお登和嬢はハツと思ひて頭を下げぬ、

## 第二百七十三 家庭の清潔

お登和嬢は難問の下に陥れり、此際何と答ふべきや、暫く頭を垂れて黙然たりしが良ありて顔を揚げ「兄さん、爾うになりましたら私は何と致して宜う御座います」と先づ兄の心を問ふ、兄は優しき様子にて「和女が爾う素直に出て呉れ、ば私も安心だ、是れが生意氣な當世風の娘だと斯う云ふ場合に直ぐ我儘を言出して、ヤレあの人と婚禮が出来なければ死んで了ふの、一生お嫁に行かないのと飛んでも無い事を言ふ、それも一事の感情で暫くすると直きに其事を忘れる癖に何ぞと云ふと一生何するの斯うするのと生涯の事を軽々しく斷定する、實に思慮の無い輕卒な話だ、中にも自分の我儘から即ち動物性の感情から父兄に隠れて自分の好きな男に思ひをかけて、此の戀が叶はなければ死ぬと云ひ出す様な不所存者もある、それを一部の社會では神聖な戀愛だとか人情の自然だとか、大層褒め囃して獎勵する様な口氣がある、實に沙汰の限りだ子、人間は誰でも自分の分限を守つて心の規を越えないのが美德だ、我儘な情が起つたら自らそれを抑制しなければならんのが人の道だ、譬へば私が書生上りの瘦文學者の癖に上流社會

の人の眞似をして馬車へ乗り度いと言つたら誰でも私の狂愚を笑ふだらう、私がそれよりも極端を言つて馬車へ乗れなければ死んだ方が宜いと言つたら誰も本氣の沙汰と思ふまい、馬車へ乗れんからと云つて私が憤死したらそれこそ世間の笑ひ者になるだらう、戀愛はそれと同じ事で自分があの人を好むと思つたら何でも構はずその我儘を立て通すのだ、その我儘が立て通せないで自殺でもすると失戀の人だとか情の至りだとか大層褒められる、戀の叶はないで死ぬのは馬車へ乗れないで憤死するのと少しも變つた事は無い、戀愛と云ふ事は人の我儘だ、若い内の罪過だ、動物性の劣情だ、褒めるところか最も排斥すべきものだ、今の青年男女は此の戀愛の爲めに身を誤るもの幾人だか知れない、實に歎息すべき惡風だ、是れからの清潔なる家庭には決して戀愛に關した書物などを容れべきもので無い、子女を教育するものは嚴重に監督して爾んなものを子女の眼に觸れしむべきで無い、モ―一層社會が進歩したら戀愛を説く者盡く風俗壞亂と認めて發行を停止するに至るだらう、社會は進歩して行く程規律的又軍隊的にならねばならん、社會の害毒になる様なものは一令の下に排斥して社會の空氣を清潔に保たしめなければならん、不潔醜猥な戀愛談をして青年男女の間に跋扈せしめる様ではまだ今の社會に何の規律も無い證據だ、身體を養ふ食物には不衛生的の者が多く、精神を養ふ言論文章に不潔淫靡なる者が多い様では國民の心身次第に腐敗して了ふ子、アハ、實に困つたものさ、和女の大原さんに對する心は決して戀愛的の劣情では無いけれども若し此事が叶はなければ一生獨りで暮らしますとでも言つたら矢張り戀愛的の劣情に陥る、愈よ大原君がお代さんと婚禮したら大原君の身を憐れに思ひ飽く迄も和女がお代さんを良夫人に仕立て、進げて大原君の幸福を増さしめる様に心掛けなければならん、子―爾うだらう」と今後の心得を諭すにお登和嬢も我意を得たる如く「ハイ、ホントに爾うで御座います」と自ら進んで答へしが中川は再び「爾うして和女は外へ好い口を捜してお嫁に行かねばならん」と斯く言はれてお登和嬢俄に愁然と差俯きぬ、

## 第二百七十四 戀愛の害

お登和嬢は頓に答ず、垂たる頭は愈よ下を向て一雫涙の適し様子、兄はあながちに深くも咎ず「お登和や、ナニも爾う言つたからとて今急に外へお嫁に行けと云ふ譯ではないが、萬一大原君の婚禮が濟んで了ふ様だつたらば爾う云ふ風に覺悟を定めて置かねばならん」と云ふ事だ、若い内は兎角何事も一圖に物を思ひ詰る癖があつてそれが為に往々正當な判断力を失ふ、男が女を見て女が男を見て何か一つ自分の氣に入つた點が現れると其外の事まで何でも良く見えて此人の外に人が無いと思ふ様になる、それが戀愛と云ふ過ちに陥る基だ、それと反對に一點の惡ひ處を見出すと何でも惡く見えて其人を嫌ふ様になる、つまり社會の經驗が足りないから物の眞相を鑑別する事が出来ない、料理の事に譬へて見ても物の味を知らない人は一杯五錢か八錢のアイスクリームを食て非常に美味いと感じて天下に此上のアイスクリームは無いと思ふだらう、もしもアイスクリームが人であつたら生意氣な娘はその五錢のアイスクリームに戀愛するかも知れない、後に至つてクリーム計りの一杯五十錢も六十錢もするアイスクリームのある事を知つて其味を試みたらば前のアイスクリームは再び喰べる氣にならん、アイスクリームだからそれで濟むけれども價値の無い人に戀愛して後に至つてその價値が無い事を發見したらモ一後悔しても追付かん、その證據には若い女に戀愛さられる様な人に餘り價値のあつた事が無い、第一私なんぞは自慢でないがまだ誰にも戀愛された事が無い」妹「オホ、爾う年中八釜しい理屈計り言つていらしつては誰でも窮屈がりますから子」兄「それだ、窮屈を嫌つて放埒を好み規律を嫌つて我儘を好む様な人に物の眞相が解る氣支が無い、社會は段々と規律的になり人は段々と眞面目になるのが進歩だから今に皆んな社會の男子が眞面目な窮屈な人になるだらう、酒を飲んで浮かれて居る様な氣樂な人間は段々減つて来る、然るに今の若い女がまだ物の味も知らないで五錢のアイスクリームを食べると直ぐに戀愛心を起すと云ふ様な有様だから實に危険千萬さ、ヤレ自由交際だの、男と女の心的交際だの、理想交際だのと勝手な名をつけて女學生や蓮葉娘の間には若い男と勝手に交際する事が流行する、その結果が戀愛となり自由結婚となり或は失戀となり自殺となり、中には最も賤むべき情死なんぞとなる、よく娘や息子を持つた親達が平氣で居られる子、全體子女を監督するものは餘程嚴重に爾う云ふ點を取締まらねばならん、二三歳の小兒を獨り

で市中へ出せば車に轢かれたり怪我をしたりするのは誰も知って居る、二十歳前後の男女は社會に對する經驗の年齢から言つたらまだ一歳が二歳の小兒だ、爾う云ふ小兒を監督者無しに情界へ追放すほど危険な事は無い、和女などは決して爾う云ふ虞もあるまいけれども自分の心で人物の良否や事の善惡を判斷し得ると思ふと大きな間違ひだ、其點に於てはまだ小兒だから一身の生涯を定める場合には必ず老巧者の意見に従はなければならんよ」と事に觸れて女の心得を諭す、お登和嬢も漸く心落着きて素直に「ハイ」と答えぬ、

## 第二百七十五 家庭の教育

素直に答へられて兄の中川は却ていみじく哀れに感ぜり、「お登和や、和女は實に素直だよ、素直は女の美德だ、自分に我慢偏執の心が無ければ何時でも素直に出来るけれども今の若い女は兎角此の素直と云ふ美質を缺いて居る、殊に學校教育を受けた女は一々何でも人の言ふ事に逆らい度がる様だ、教育を受けたらば愈よ女の心得を知つて素直にならなければならんのに今の有様は全く反對だ、是れと云ふのも學校の力が女の品性を薰陶するに足りないで注入された智識は却て自分の我儘を弁護する材料になるのだ、と云つて學校教育を受けるなどは言はない、只世人が學校にさへ遣つて置けば娘も息子も立派な人間になれると思ふのが大間違ひだ、人の品性は學校教育よりも寧ろ家庭教育に感化される、家庭教育を怠つて置いて學校が子供を悪くする様に思ふのも間違つて居る、學校では幾十百人の生徒を同じ様に教育するものだから一々一人／＼の品性を陶冶する力は無い、家庭では一人／＼に對して充分の薰育を施す事が出来る、家庭で充分に品性を養つて學校では只物の仕上をして貰ふ位に心得て居なければならん、仕上の職人が幾ら上手でも一度に澤山の細工物を仕上げる時は一々その細工物の不完全な點を直して居られない、イヤ居られないのでは無い、直す力が無いのだ、四角に削つた木地を塗物屋へ持つて行つて圓い盆に仕上ると言つても逆も出来ない、然るに世人は自分の家庭で子供を四角に育て、置いて學校がナゼ圓くして呉れないと不平を言ふ、斯んな無理な事はない、學校の方でも今迄は四角なものを圓くすると云ふ様な

法螺を吹て居たものだ、此の頃になつて漸く世人が家庭教育の必要を悟つて來たけれどもまだノ、中々それを実施する場合にならん、よしや實施する場合になつても何う云ふ風に家庭教育を施して宜いかと云ふ事が疑問になる、自由教育が宜いと云ふと子供を我儘放埒にして了ふし、壓制教育が宜いと云ふと子供が卑屈無氣力になるし、宛も料理法で物を煮る様に強過ぎる火で行かず弱過ぎる火でならず丁度宜いと云ふ程と加減を知るのが六か敷い、此に至つて大原君の洋行は我邦の前途に大影響を及ぼす事が解る、歐米各國の家庭を取調べて其長處を採り復た我邦の國情を考へて最も適切な家庭教育の方案を定めるのだから大原君の責任は非常に大きい代りにその名譽も亦た大きなものだ、大原君が洋行から歸つて來て天下に家庭教育の改良を呼號する時分は復た大食一點張の大原生で無いぜ、世間は必ず家庭の救世主を以て大原君を崇拜するだらう、今迄は政治界で崇拜される英雄もあり、實業界で崇拜される金満家もあるけれども人の家庭で崇拜される偉人が無い、然るに人の家庭は今最も救世主を渴望して居る、そこへ大原君が歸つて來てあの誠實と熱心とを以て盛に家庭改良を唱へたら天下靡然として之に従ふだらう、實に愉快だな、然し其時大原君の夫人がお代さんでは何うもチト釣合が悪いアハ、と笑ひながら言ふ言葉の中には如何にしてもお登和嬢を其時の協力者たらしめんとこの意分明に聞ゆ、お登和嬢は大原の前途を想ひて復たしても深き思ひに沈みぬ、中川も同じ心にて「ホントに小山君は何うしたらう」と立つて窓より戸外を覗くに宛も此時大原家を立出でたる小山が此方を望んで來か、れり、中川妹を顧み「お登和や、小山さんがいらつしやるよ」お登和「アラ爾うですか」と思はず立つて迎ひに出る、小山が玄關より座敷に入り來るや中川も心急ぎて挨拶さへ打忘れ「小山君、あの事は何うなつた子」